

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00444

研究課題名（和文）19世紀イタリアにおける言語の「近代性」の探究 マンゾーニとレオパルディを中心に

研究課題名（英文）The Search for Linguistic Modernity in Italy in the 19th century ---- with a focus on Manzoni and Leopardi

研究代表者

糟谷 啓介（KASUYA, Keisuke）

一橋大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：10192535

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、マンゾーニとレオパルディという19世紀イタリア文学を代表する二人の文学者による言語の「近代性」の追求の諸相を明らかにすることにある。マンゾーニは、自身の言語理論を実践に厳格に適用し、創作においても政策においても、一貫してフィレンツェ口語による単一言語主義的解決策をとった。それに対して、言語の本質を多様性と動態性に見ていたレオパルディは、言語に単一の規範を押し付けることに反対した。しかしレオパルディは、近代性そのもののなかに、言語の力の衰弱を招く要因があるとも考えていた。レオパルディの言語思想の特徴は、近代性の追求そのもののなかに近代批判が内包されていた点にある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、イタリアの「言語問題」が19世紀になって新たな展開を見せたことを、マンゾーニとレオパルディという二人の文学者の格闘を通じて明らかにしたことにある。マンゾーニについては、フィレンツェ中心主義の原理が言語理論、執筆過程、政策提言のすべてを結びつけていたこと、また、レオパルディについては、その言語思想のなかにニーチェを思わせるような近代批判と言語の比喩性についての洞察が含まれていることを重視した。社会的意義としては、本研究で論じた言語と文体の問題は、社会、文化、政治に直結する問題であり、イタリア語だけではなく、あらゆる言語に共通する問題であることを明らかにした点にある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify various aspects of the pursuit of linguistic "modernity" by Manzoni and Leopardi, two representatives of 19th-century Italian literature. Manzoni rigorously applied his own theoretical principles to his practice, consistently adopting a Florentine colloquial monolingual solution, both in his own writings and in his policy recommendations. In contrast, Leopardi, who saw the essence of language as diversity and variability, opposed imposing a single norm on language. But Leopardi also believed that modernity itself contained factors that might weaken the power and beauty of language. The greatest challenge for Leopardi is how to reach linguistic modernity without compromising the dynamism of language. A characteristic of Leopardi's linguistic thought is that the pursuit of modernity itself contained a critique of modernity.

研究分野：人文学

キーワード：イタリア語 マンゾーニ レオパルディ 近代性 言語問題

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は、2015年度から2017年度まで、科学研究費基盤研究(C)「言語と文体の階層制に関する研究—イタリアの「言語問題」を中心に—」を遂行した。この研究は、14世紀から19世紀、さらには現代まで連続と続くイタリアの言語規範をめぐる論争を歴史的に追跡することによって、その言語思想的な内容を分析することを目的とした。しかし、言語問題の時代貫通的なあり方に焦点を合わせたために、特定の時代が課した制約については、十分な考察を行なうことができなかった。とくに、18世紀後半以降、「近代」と称される時代についてそれがいえる。そこで、言語に関してどのようなかたちで「近代」が主題化され、どのような考察が展開されたかに絞って研究を進める必要が生まれた。とくに、19世紀イタリア文学を代表する二人の文学者、マンゾーニとレオパルディの独創的な言語理論に焦点を合わせた。これが2018年度から2022年度まで実施した基盤研究(C)「19世紀イタリアにおける言語の「近代性」の探究—マンゾーニとレオパルディを中心に—」である。

## 2. 研究の目的

イタリアは、話し言葉と書き言葉の乖離、伝統的修辞法の支配、言語的中心の不在などの言語的原因に、知識人と民衆の離反、政治社会の分裂、統一国家の不在などの社会的問題が積み重なって、言語の近代性に対する取り組みが大きく遅れた。これらの問題群に対して、マンゾーニとレオパルディではまったく異なる方向性が示された。これはイタリアが直面していた言語の近代性そのものの振幅の大きさを示すと同時に、この両者の洞察が、イタリア語に限らず、あらゆる言語にとっての普遍的な問題の層にまで到達していたことを示す。そこで重要なのは、レオパルディの思想に見られる近代批判である。レオパルディは、近代の極端な合理主義が言語と精神にあたえる否定的影響、とりわけ精神の受動性を引きおこす傾向を批判していた。

## 3. 研究の方法

研究方法の第一は、マンゾーニとレオパルディの思想の相互比較によって、イタリアにおける言語の近代性をめぐる問題系の全体像を描き出した。これを通して、両者の思想を個々別々に取り上げるだけでは明らかにできない問題の広がりや文脈を把握することができた。第二は、理論と実践の循環性に注目した。両者の言語理論は、言語の本質をめぐる考察にはじまり、イタリア語の歴史に関する判断を経由して、文学創造における言語表現の追求という実践の領域に入りこみ、さらにそれが具体的な言語状況に対する政策へと展開される。しかし、個々の局面は緊密に結びついており、線的な因果関係を想定することができない。第三は、時間的影響関係に還元されない思想の共振性に注目することである。本研究では、レオパルディとニーチェの間に見られる本質的な共振性と類縁性に注目した。つまり、よく指摘されるように、レオパルディのペシミズムがニーチェに与えた影響と刺激を強調するよりは、文献学を通じた近代批判が両者を結びつけていることを明らかにした。

## 4. 研究成果

### (1) イタリアにおける「言語問題」

言語に関してイタリアは特異な国である。14世紀にイタリア文学が成立して以降、文学者にとって「イタリア語」は自然な所与ではなかった。文学者が自分の作品に用いるべき語彙と文体について悩むのは当たり前のことである。しかし、イタリアのように、創作にとりかかるなかで、あるいはそれに先立って、自分はどの言語を規範とすべきかを意識的に考え、場合によっては、自分の言語選択に関する立場表明をする必要に迫られるのは尋常な状態ではない。端的にいえば、イタリアでは文化を統括するような安定した言語規範がまったく成立していなかった。

それでは、このような言語状況に対して、文学者はいかなる態度をとったのだろうか。以下に、マンゾーニとレオパルディがあたえた回答を見てみることにする。なお、マンゾーニとレオパルディの引用はすべて Manzoni 1974, 1990 と Leopardi 1996 から行なうが、引用箇所は刊行本の頁数ではなく、原典の段落番号により示す。

### (2) マンゾーニの言語理論と言語政策

マンゾーニの言語論を理解するためには、次の二つの極を見失わないことが大事である。ひとつは、小説『いいなづけ』の執筆過程であり、もうひとつは文部大臣ブロリオが設置した言語委員会での活動である。マンゾーニはこの歴史小説で17世紀ロンバルディアの現実を緻密に描写するための文体を模索した。最初の草稿『フェルモとルチア』では、トスカナ語を基本としつつフランス語法を大胆にとり入れた「ヨーロッパ的文体」を、1827年版ではイタリア各地の方言

要素を包括したトスカナ語を、そして最終の1840年版では、フィレンツェ語の口語慣用に厳密に従った文体に書き換えた。マンゾーニにとってフィレンツェ語は母語ではないので、フィレンツェ語を母語とする若い友人の手助けを得ながら、書き換えを進めた。その一方、1868年に発表された言語政策案「言語の一体性とそれを普及させるための手段について」においてマンゾーニは、小学校での言語教育を通じて、イタリア各地の方言をフィレンツェ語に「置き換え」ていくことによる言語統一を提案する。つまり、各地の方言をフィレンツェ語口語慣用で置き換えるという過程は、小説執筆と言語活動で共通している。そこで重要になるのは、この二つの極を結びつけるマンゾーニの言語理論的考察である。

マンゾーニの思想が徹底的だったのは、言語の本質をめぐる理論的考察から、フィレンツェ語口語慣用をイタリアの言語規範として採用するという文学者の立場、そして言語政策提案者としての判断に至るまで、一貫した方向性を頑強に維持した点にある。

マンゾーニの理論の出発点になったのは、とくにコンディヤックから「イデオログ(観念学者)」に至るフランス啓蒙主義の言語理論である。それによれば、言語は観念の記号であり、観念は事物の記号である。言語の機能は、精神のなかに生起する同時的思考を継起的な観念の列に分析し、それを他者に伝達しうる記号の列に変換することである。その意味で、言語は「社会的交流(commerce)の道具」である。したがって、言語記号と観念のあいだの一義的關係は保たれねばならず、多様性や流動性は排除される。マンゾーニが多様な方言の除去をめざし、言語規範の統一性と安定性をなによりも重視したのは、こうした言語理論からの要請でもあった。

そうだとすると、マンゾーニはなぜフィレンツェ語による方言の「置き換え」という、強引ともいえる人為的手段を選択したのだろうか。この点は多くの研究者を悩ませてきた問いである。ひとつには、自分の体験がその有効性を確信させたためであろう。しかしより重要なのは、「フィレンツェ語による方言の置き換え」がマンゾーニ理論の実践的帰結であったという点である。

マンゾーニのいう「言語」とは、漠然とした概念ではない。それは特定の社会のなかで思想の伝達に用いられる記号の総体のことである。それを支えるのが社会の「慣用(uso)」である。したがって、言語を根付かせ、普及させ、安定させるには、社会のなかのなんらかの力が介入する必要がある。それがまさに国家の役割であった。

マンゾーニにとって、フランスという国は、明晰判明を旨とする言語表現についても、言語の一体性を保持する中央集権的言語体制についても、従うべきモデルであった。1868年の報告の内容を詳しく説明した『補遺(Appendice)』のなかで、マンゾーニはフランスの言語体制が確立されるさまをこう描いている。フランスでは「パリの言語が国民の言語として認められている」が、「この習慣はユグ・カペーが王座に就いた10世紀末に始まり、12世紀には確立された」。しかし初めからパリの言語がフランス語であったわけではない。そこに至るまでには、地方の言語がパリの言語に置き換わるプロセスが必要であった。フランス語は「首都である小さな都市」「小さな国家」から四方に広がっていったが、それは王権の拡大と平行していた。つまり、「国家が拡張するにつれ、首都のことばであることから来る特別な優越と効力をともなって、フランス語はそれに付き従った」のである。

しかし、このフランス語の拡大の蔭には、地方の多くの言語との「対峙」と「格闘」があった。マンゾーニはいう。「フランス語の場合、征服者たることばが地方の多くの方言と対峙し、いわばそれらと絶え間なく格闘した。そのことばは自分の存在をたえず感じさせ、生活のあらゆる局面に関与し、そして(不可欠な条件として)滅ぼそうとするものの等価物を与えるために存在していた。それは、どんなに優れた本であっても、絶対に達成できない効果である。」(Appendice, 23-25)

ここでいう「滅ぼそうとするものの等価物」をあたえることが、「方言からフィレンツェ語への置き換え」なのである。しかし「本=書き言葉」はこの仕事を担うことができない。なぜなら、書き言葉によるコミュニケーションは、マンゾーニの見方では、社会関係を構築することができないからである。それはひとえに国家による話し言葉の普及を通してしか達成できない。

理論から実践まで一貫した理路で貫かれているマンゾーニの言語理論=言語政策は、「言語問題」のなかで、稀に見る徹底性と体系性を備えている。とはいえ、その背景に、マンゾーニを後押しするような社会情勢があったことは確かである。ひとつは1861年のイタリア統一であり、もうひとつは1864年のトリノからフィレンツェへの遷都である。つまり、マンゾーニが自らの言語政策案を提案したとき、フィレンツェは名実ともにイタリアの首都であった。こうした長年の希望が達成されたことが、マンゾーニ理論にいくばくかの楽天性を付与した。ただし、1870年にローマへの遷都が実現したことで、マンゾーニ理論の大きな支柱が失われることになる。

### (3) レオパルディの言語論

レオパルディの言語についての考察の大部分は、彼が遺した膨大な草稿群、いわゆる『思索雑録(Zibaldone di pensieri)』のなかに見ることができる。この草稿群は、哲学にはじまり、文学、芸術から社会、歴史に至るまでほとんどあらゆるテーマを扱っているが、そのなかのひとつの柱が言語である。しかも、言語記号、言語の変異性と多様性、詩的言語、言語史、言語と社会の関係、翻訳の問題など、ありとあらゆる言語についてのテーマが扱われている。

この草稿群は1817年から1832年にかけて書かれ、全部で4526ページに達する膨大なものである。レオパルディは、いつかは著作として刊行するつもりであったが、議論が錯綜をきわめたため、一冊の書物にまとめることはできなかった。たしかに、ここでは同じテーマが少しずつ違

う角度から考察され、さまざまな複数の回路が描かれる。序文から結論に至る単線的な道筋もなく、入口も出口も示されない。こうしたテキストのあり方自体が『雑録』の本質的特性であるといえる。しかし『雑録』は覚え書きの雑然とした集成ではない。レオパルディが1827年に『雑録』の目次として書いたメモには、「イタリアの文学と言語」という章立てが掲げられ、「今日のイタリアにおける真の文学と言語の嘆かわしい状況。イタリアに近代語(lingua moderna)をつくる必要」(Gensini 1998: XLVI)があるという。これを見れば、『雑録』には「近代語の探究」という一本の線が貫かれていることがわかる。しかしその探究は極めて複雑な理路をたどった。

マンゾーニもレオパルディも、思想の出発点のひとつはフランス啓蒙主義にあったが、その理論的前提をほぼそのまま受け継いだマンゾーニと異なり、レオパルディはフランス言語理論の合理主義的帰結からは遠ざかっていった。

レオパルディはマンゾーニと正反対に、多義性と変異性が言語の本質に根ざしていると考える。レオパルディによれば、言語の本質的な役割は、転変する現実や感情の陰影をさまざまな手段を使って表現することにある。こうしたレオパルディの認識を支えるのが、parolaとtermineの対立という概念である。parolaはイタリア語の通常の用法では「語」を表わす(したがってフランス語のparoleとは意味範囲が異なる)のだが、レオパルディはそこに独特の意味合いを含ませて使った。図式的にいうならば、parolaは想像力に基づく詩的言語であり、termineは理性に基づく科学言語である。前者はさまざまな文脈に寄り添って多彩な意味を表すことができるが、後者は文脈から独立して常に同一の意味を保つ。前者は必ずしも一義的な定義が可能ではない漠然としたイメージを描くのに対し、後者は厳密に意味が区画された固定的概念を言い表わす。

この対立は、ある意味では、理性／想像力の対立を言語に投影させたものともいえるが、レオパルディの考察が卓抜なのは、parolaとtermineが関係的な概念であると指摘した点にある。ある語はparolaであり、別の語はtermineであるというわけではない。これは意味形成の二つの極を表しているのであり、言語記号はこの極のあいだを絶え間なく揺れ動いているのである。

レオパルディはparola/termineの二分法を共時的カテゴリーとしてだけではなく、言語の歴史的展開の相としても考えていた。ここには文献学者としてのレオパルディの志向性がはたらいっている。レオパルディは、言語の本源的な姿はparolaにあると考えていた。すなわち、概念よりはイメージを表わし、さまざまな意味の変異を実現するような記号である。しかし、言語の歴史、さらにいえば文明の歴史はparolaの衰退とtermineの増大という方向で進んできた。それは科学の進歩と知識の増大という肯定的な側面を含みながらも、かつて言語がもっていた力強さ、柔軟さ、繊細さが失われてきたというのである。このような認識は、抽象的な言語の発展図式としてだけではなく、歴史的な言語の性格についての議論にもあてはめられた。それが典型的に現われるのは、レオパルディのフランス語に対する評価である。

レオパルディによれば、フランス語はルイ14世の治世以降、安定した規範が確立して統一性と画一性をもつにいたったが、その代わりにフランス語は古代語がもっていた言語の本来的な動態性と生命力を失うに至った。レオパルディは「あらゆる古代語は近代語よりいかに大胆であったか」「大胆さが古代語にいかにかふさわしいか」「したがって、その本性からして、古代語は近代語よりもいかに詩に適しているか」を考えてみるべきだという(Zibaldone 3864)。レオパルディが古代語とくにギリシア語の優秀さをいうのは、著作の権威に基づいてではない。ギリシア語が複合語や派生語を作るときのダイナミックな性格に現れる言語の柔軟さと力強さを指している。

それに対してフランス語に対する評価はこうである。「思うに、フランス人は、他のことはさておき、言語と文体に関していえば、詩的言語を完全に欠いているし、その本性からして、詩的言語をもちえない。なぜなら、本質的にフランス人は、行為の単独性(singularita)にくわえて、話すときも書くときも、ことばの単独性を敵視し憎む傾向にあり、実際にそうしているからである。ところが、詩的言語はその本性からして日常言語とは異なる。したがって、フランスの社会や国民とは本質的に相容れない」(Zibaldone 3864)。

レオパルディによれば、フランス語は「近代教養語のなかで(したがってあらゆる言語のなかで)、議論の余地なく、もっとも卑屈(servato)、もっとも自由でない言語」であり、それは「なによりもまず理性に基づいて型どられたことの自然な帰結」(Zibaldone 1007)なのである。レオパルディは、フランス語が「凡庸さの言語」(Zibaldone 1985)だといっているばかりではない。これほどまでにフランス語に否定的な価値判断を下した文学者がほかにいるだろうか。このようなレオパルディからすれば、フランスにおける言語状態を理想のものともみなすマンゾーニの考えがまったく相容れないことは明らかだ。しかもレオパルディは、「フィレンツェは一度もイタリアの中心でなかったにもかかわらず、そこが言語と文学の中心となるべきだというばかげた考え」(Zibaldone 2064)を嘲笑しているほどである。

しかし、レオパルディがフランス語を批判したのは、フランス語そのもののせいではない。それは、レオパルディが、フランス語に典型的に見られる「近代」の否定的徴候を感知したためである。近代とはtermineの拡大とparolaの衰弱によって進行するとすれば、それは同時に理性の拡大と想像力の後退をもたらす。レオパルディはこのような近代の傾向が言語表現そのものの弱化をもたらすことを恐れていた。レオパルディはイタリアの文学伝統の古い枠組みを打ち破って、「ヨーロッパ的」な新たな表現を模索した。しかし、その武器となるはずの近代には、致命的な欠陥が存在した。それではどうすればいいのか。この答えは『雑録』にではなく、レオ

パルディの詩作品そのもののなかを探すべきである。

#### (4) レオパルディとニーチェ

レオパルディが古代語と近代語をくらべて、後者の「大胆さ」を高く評価したのは、言語の基準だけに基づいているのではない。言語の「大胆さ」の不足は、行為の「大胆さ」、精神の「大胆さ」の不足の結果であるとともに原因である。こうしてレオパルディの近代語批判は、さらに視野を広げて近代そのものの批判へとたどりつく。その批判の切先は実に苛烈なものがある。

たとえば、『雑録』でレオパルディはこういう。近代人の「公正、誠実、秩序、法の遵守、清廉さ」を求める態度は、「徳」や「精神の偉大さ」から来るのではない。それは「心情の卑しさと貧しさ、怠惰と無為、内的・外的な脆弱さ」から生まれる。彼らは自分たちを養い守る欲求も気力もないので、「法と社会が自分たちを守ってくればよいと願い」、「それらに寄りかかって暮らす」。彼らには「尋常ならざるものものを希求する精神」「善や快を追求する精神」「自分たちの状態を前進させようとする精神」もない。ささいな困難や障害を忌避し、「習慣と秩序の外に出ようとせず、なんら危険を冒そうとしない」。これらの者は、どんなに他人を傷つけなくても、「慈愛を知らない比類ないエゴイスト」であると。(Zibaldone 3316-17)

これはまるでニーチェを思わせる文章ではないか。ニーチェは一時期レオパルディに強烈な関心を示したあと、晩年にはそれほど評価しなくなってくる。それはいわゆる「ペシミズム」への評価と一体である。しかし、レオパルディといえば「ペシミズム」というお決まりのレッテルを貼るのはやめにしたほうがよい。たしかに、『雑録』はニーチェの存命中は未刊行であり、ニーチェはそれを目にする機会がなかった。しかし、ニーチェのレオパルディへの言及だけから、両者の思想の関係性を推しはかることはできない。そこには時間的影響関係をこえたところではたらく思想的共振性がみられる。とりわけ、文献学的思考に根ざした近代批判という精神は、ニーチェ本人も知らないかたちで両者を橋渡ししている。

ニーチェは晩年に記した『曙光』の序文でこういう。「私とこの書とは「緩徐に(レントー)」の愛好者だ。私が文献学者であったのは無駄ではない。私はいまなお文献学者だろう。つまりゆっくりした読み方の教師だろう」。文献学とは「緩徐に(レントー)」やるのでなければなにごとでもできない言葉の金細工師の技術・知識」であり、「躁急の時代、一切を、すべての新古の書物にしても、早速「片づけ」てしまおうとする不躰けな汗まみれな性急な時代のさなか」に「回り道をし、時間をかけ、静かになり、緩慢になること」を求める学問なのである(ニーチェ 1980:18-19)。この緩慢で静かな歩みこそ、レオパルディが最晩年の長編詩——韻文と散文の入り混じった「思想詩」ともいえるもの——で歌った、「緩やかなひこばえ(lenta ginestra)」(lentaはlentoの女性形)の生命力のしるしである。それは、効率と速度を至上のものとする近代に抗して、「遅さ」を志向する独特な思考のあり方である。

#### 引用文献

Gensini, Stefano, 1998, Leopardi <filosofo linguista italiano>, in Giacomo Leopardi, *La varietà delle lingue. Pensieri sul linguaggio, lo stile e la cultura italiana*, Firenze: La Nuova Italia, pp. XIII-LXIV.

Leopardi, Giacomo, 1996, *Zibaldone*, a cura di R. Damiani, Milano: Mondadori.

Manzoni, Alessandro, 1974, *Tutte le opera. Scritti linguistici e letterari*, t. 1, Milano: Mondadori.

Manzoni, Alessandro, 1990, *Tutte le opera. Scritti linguistici e letterari*, t. 2, Milano: Mondadori

ニーチェ 1980、『ニーチェ全集 9 (第1期)』氷上英廣訳、白水社。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 糟谷啓介	4. 巻 14
2. 論文標題 ひとは聞きたい話しか聞かない：聴衆の欲望について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語社会	6. 最初と最後の頁 426-440
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 糟谷啓介	4. 巻 13
2. 論文標題 参照枠としてのイタリアの「言語問題」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語社会	6. 最初と最後の頁 440-456
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Keisuke Kasuya
2. 発表標題 Classificazione sociale del linguaggio e ideologia linguistica nel caso del Gregoire e del Manzoni
3. 学会等名 Espaci Occitan, Dronero, Italia, 23 Agosto 2022. (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中井 亜佐子、小岩 信治、小泉 順也	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 言語社会 を想像する	

1. 著者名 クロード・アジェージュ、糟谷 啓介(訳)、佐野 直子(訳)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 380
3. 書名 共通語の世界史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------